

名城大学 F D 委員会

Meijo FD NEWS

Meijo University Faculty Development News

Vol.3

2005.3

授業を語ろう！

- ◆ 第2回 [授業参観／同僚に学ぶ]
- ◆ プラス思考の授業を展開！
- ◆ PICK UP VOICE
- ◆ 第6回学内FD講演会「大学力を創るFD～学部FDからの出発～」速報
- ◆ 時の語り部
- ◆ FDの扉 vol.2

プラス思考の授業を展開!

第2回【授業参観／同僚に学ぶ】授業検討会 記録

平成16年6月17日(木)14時～
 タワー75 レセプションホールにて
 参加人数28名(内、授業担当教員8名含む)

※録音は不可としたため、記録内容は簡単に纏めてありますことをご了承ください。

挨拶

原(FD委員長、副学長)：【授業参観／同僚に学ぶ】では授業を公開して下さった先生方、ありがとうございます。私も参観させていただきましたが、90分の授業がいかに大変か身を持って分かりました。

杉下(大学教育開発センター長)：授業を担当された先生方、どうもありがとうございました。

西田(FD委員会授業参観チーム座長)：司会を理工学部で齋藤先生におねがいします。よりよい授業をおこなうため、どのように授業を工夫なさったかについて、授業を公開された先生がたからお言葉をいただけたらと思います。

齋藤(FD委員)：それでは、谷口先生おねがいします。



よりよい授業をおこなうため、どのように授業を工夫したか

谷口(授業担当)：授業をどのように行うかは永遠の課題である。学生の関心を引くために、何かを行っている、ということではない、今回のために、特別なことをおこなったわけではなく、淡々と授業を行った。気持ちのよい授業を心がけたつもりである。FD委員ということで担当することになったが、他の先生方から、工夫されているという評価をいただいたと感じている。

鈴木(授業担当)：2年生の授業薬学英語を担当。近年、優秀な学生が入学してきている。専門のアメリカの1、2年生が使用するレベルのテキストを

取り扱っている。薬学英語を担当して20年以上になるが、専門内容と英語の両方を理解していないと難しい。生物化学と有機化学の中のイデオムで同じような表現でも、調べてみると、受験に使われている英語は実際には使われていないことがわかった。たとえば、maybeと言う言葉は専門書では全く使われていない。なぜ、専門英語が大事なのか、という証拠を示すことに主眼を置いている。

岡本(授業担当)：オーソドックスな授業を行っている。中身のわかりやすい授業を心掛けている。以前、学生から黒板の文字が小さい、という指摘を受けて文字を大きくしたら私語がなくなったという経験がある。いかに大学の授業が学生にとって分りにくい、ということを感じている。学生が90分聞いている事は大変だと思い、1、2分の休憩を挟んでいる。

平山(授業担当)：昨年度の第1回でもおこなった。情報処理室という特殊な教室で授業を行っているが、授業の改善、ということはなかなか出来ない。90分を学生が受身で過ごす時間ではなく翌週の時間までも含めていかに能動的に授業を受け入れるか、が大切。どれだけ、学生が夢中になれるかという環境を提供できるか、という部分と、学生が授業から何をつかめるか、ということ。学生たちが、教職の立場に変わったときに役に立つものをと思う。

三町(授業担当)：計算力が近年落ち、微分方程式を解かせることが第一。何かをわかって帰る、という授業を心がけた。小テストをやらせているが、多少学生同志相談等してもとにかく解かせることで理解させること。少なくとも、紙を出させることで、続きを家でやる、ということに繋がっている。

石原(荘)(授業担当)：日ごろは声が大きいのだが、当日は自分の健康上断ろうかと思っていた。きちんと評価していただけてよかったと思う。学生は日ごろより、声が小さく丁寧に質問に応えていた。たくさんの教材がバックにある。質問したことが一つの功績になる。TAを用いて質問を盛り上げている。答えは何通りもあるが、学生は一つだと思い込んでいる節がある。工学はいく通りもあるが、それによりエンジニア同士の見解の相

違を生むことがある。こういう努力が就職に役立てばよいと思う。

石原(廣)(授業担当)：人間学部の2年生の選択科目を担当している。人間学部の学生は化学や生物をほとんどやってきていない。アンケートを書かせているが、授業の最初の方は、学生は何の意味かも分らず受講するため、「何のために受講するのか」という学生もいる。今は、多少の興味をもってきている。

村松(授業担当)：人間学部の中では国際的な分野の科目を担当している。今の学生は生まれながら、映像に親しんでいる。ところどころで映像を取り入れるようにしている。JABEEの関係で、評価を出させている。また、小テストで出席管理も同時に行っている。人間学部の学生と理工学部の学生を座席の列に交互に並べている。相互がお互いに知恵を出し合って高めていければよい。話し方がやさしい、良く分るけど眠くなります、と学生から指摘されている。

齋藤(授業参観チーム委員)：先生方の暗黙の対話が出来ており、間の取り方もうまい、資料も完璧に準備されているという印象があった。教えた授業をすべては教えられていない、という現状がある。ご意見を伺いたい。

杉下(大学教育開発センター長)：石原(荘)先生、村松先生の授業を拝見させていただいた。山形大学では言いたいことを言い合って参考にしていこう、ということで、本学もそうありたい、という願望がある。石原先生は教卓に居ることがほとんどなく、学生に考えさせる授業を行っている、という授業風景は非常に参考になった。資料を配布し



説明されるが、自分が説明する箇所のOHPなどを使用して説明されている。しかし、板書が不統一で、学生はどのようにまとめられるのかが難しいと感じた。国際文化論の村松先生は、留学生を参加させたり、TIMEの表紙を学生に考えさせたり、と非常に興味深い授業を行っていた。理工学部の学生が単位をもらうために文系に受講に行っているという噂を聞いていたが、観察してみるとやはり問題があった。石原先生の授業ではこういったことは全くなかった。人間教育の場としては注意すべきだ。留学生の所属しているナンシー大学では遅刻は全く無い。私自身は理解度カードというものを配って授業を工夫している。

石原〔廣〕(授業担当)：集中力を欠いているのは人間学部の学生でなく、理工学部の学生がほとんど。受講人数は少ないが気になる。

原(FD委員長、副学長)：石原(荘)先生の授業を私も聴いたが、質問するためにあちこちをまわってマイクを向けている。学生があまり応えてくれず、大変な努力だと思う。

石原〔廣〕(授業担当)：理工学部の学生はたまに遅刻している。なぜ、生命科学の授業を聞きに来ているのかわからない。

道山(FD委員)：やさしい顔をして遅刻をさせず、興味を持たせる方法は無いものか。

石原〔廣〕(授業担当)：出席はとらないが、アンケートをとっている。配布のタイミングはまちまち。宿題をだして、次の授業に役立てている。

石原〔荘〕(授業担当)：他学科の都合で最初(1



回目)の授業を出ていない学生がいるので、遅刻するな、などと言うことはむずかしい。

村松〔恵〕(FD委員)：履修登録期間を「お試し期間」という指導を事務室がしているという話があり、その発想・指導は絶対にやめてもらいたい。

谷口(授業担当)：講義ノートに「試聴」と書いている。わかりやすく教えるのが大事、という場合とアカデミックであったり、役に立つということが大事な場合がある。大学での最低限レベルを保ちながら、知ってもらって、分ってもらうことが必要。授業の方法に自分の表現を明確にする、授業とは何かという永遠の課題だと申し上げたが、そこから始めなくてはいいけない。

柴田(FD委員)：職場(就職センター)で企業の方と話したり学生と接したりしていると、最近の学生は、特に挨拶が出来ないとか時間を守らないとか、マナーが不足していると強く感じている。ということを見ると、講義方法にも工夫が必要で、高校レベルの講義方法(マナー指導等)を採り入れる必要があるのではないか。遅刻とか居眠りは許されるべきではなく、そこから解決していかなければならないと思う。

斎藤(FD委員)：最初の講義を聞いていないと...

石原〔廣〕(授業担当)：薬学部は小テストをする問題ないが、人間学部の学生はテストにアレルギ一反応を示す。

石原〔荘〕(授業担当)：採点するのは大変。事務的な負担が大きくなってしまっており、その足かせのなかで講義を実施しなければならない。

斎藤(FD委員)：JABEEのあり方を検討していかなければならない。

板橋(参観者)：JABEEに関連した小テストのことで、毎回とっておく必要がなくなった。学生には講義の内容をまとめて書かせる。宿題を課して、顔写真付の宿題を提出させる。教科書をまるごと書いてくる学生には指導し、上手に書いた学生にはほめることが大切。学生は顔を教員に覚えられているという思い込みから、緊張感を持っている。

ベストティーチャー制度について

山本(参観者)：民間企業にいたのだが、今回のこのような会議には関心のある人が集まってきている、と感じている。1年生に授業への関心を持たせることが難しい。自分で評価アンケートを実施している。一番関心のある学生が三町先生だと回答した。わかりやすく、寝られないということらしい。研究業績は明確な評価手段があるが、教育業績にははっきりしたものがない。数学のように業績を評価しにくい、という現状があるが、オーソライズされた若手のベストティーチャーのような方を挙げる制度を考えていただけないか。

板橋(参観者)：教育評価を制定することは大賛成。今の学長が副学長のときに杉下先生を評価しているが、それ以降ない。それはFD委員会が管轄ではあるが、建設システム工学科では学生の意見を聞いて、学科単位で表彰しようとしている。

山本(参観者)：学科だけでなく、学部単位で表彰し、広報にも掲載するなど、公表したほうが、目標となる先生を作り上げた方がよいのではないかな。ぜひ、理工学部だけでもモデルとして行いたい。

鈴木(授業担当)：寝ている学生を減らそう、ということで再試験を受験するのに条件を設けた。私の授業では席を一つずつ空けて座らせて、プラス3点を与えている。これが授業の活気を生んでいる。日本の教育では人前で手を挙げることは恥ずかしい、という環境におかれているが、グローバルな時代に手を挙げることは大事なことで教えている。ものを言うときは論拠を持って話すことだ、とも言っている。正確・簡潔・クリアに話すよう指導している。わかりやすい点のみを心掛けて学生に迎合しているだけでは大学のレベルは保てないと思っている。

石原〔荘〕(授業担当)：理工学部だけでもいいが、理論だけで物を組み立てる、ということではなく、先生はタレント性を見られて、逆に低く見られてしまうのではないかな。入学を許した以上は、その学生たちが理解し、力を付けていかなければいけないと思う。67歳になるが、ドクターがとりにくくなっている。60歳を超えてもちゃんと授業を出来るということをお話したい。

谷口(授業担当)：枠を超えて教員を評価する、ということは難しい。学科単位なら出来る。基準の作り方が難しいし、評価することも難しい。特に文系

学部ではそうだと思う。教育業績・評価を出すのは簡単なことではないので、良い知恵をいただきたい。

石原〔荘〕(授業担当)：表彰対象の表現をパーソナルオブザイヤーのように、固く考えずにさわやかに笑って祝えるような表現にしてもらいたい。

谷口(授業担当)：他人の授業を聞かない、ということに難しくするという実感をお話している。

板橋(参観者)：この授業はいいぞ、ということが、教員全体のスキルアップに繋がれば良い。

谷口(授業担当)：一国一城の主という言い方に表現されるように、大学あるが故の序列を嫌う風潮がある。

石原〔荘〕(授業担当)：評価できる・できない、という程度に考えれば良い。軽いレベルに考えれば良いのではないかな。今までは教員の調査だけがあって、それに報いがなかった。

ベストティーチャーを謳う前に、プロフェッショナルスタンダードの確立こそ大事

池田(FD委員)：今回、6つの授業を参観した。教師の視点からみたり、学生の視点でも見た。先生方の責任だけでなく、学生の責任が重要になっている。ベストティーチャーを謳う前に、プロフェッショナルスタンダードの確立こそ大事。三町先生の話から三町三原則と勝手に名付けたが、何を伝えたいか

①「きっと」役に立つ、というメッセージを伝えること
②判って帰れる授業

③分からないところをちゃんとチェックする。テストするのはではない

基準を明らかにする、基準を示すことの出来ない先生方は新たな基準を持つ必要がある。大人になりきれない学生は、ロースタンドの授業にはついていけない。学生を仕上げていくことのFDを目指せば必然という授業になっていくと思う。教育業績は基準を設けて、数値化し、それから先生方の技量を把握していく。個人のすばらしい一部の方を表彰しても全体を挙げることはならない。

板橋(参観者)：昨年度の授業公開は全学で28名の方にやっていただいたが、全ての授業を公開性にし、同僚から何かプラスになるというアドバイスをもらえれば、いつでも緊張感を持って授業が出来ると思う。

斎藤(FD委員)：つながりの部分の場をFD委員会と与える。学科単位でも学部単位でもいいが、いくつかの授業間でつながりがあれば学生が理解しやすいということがある。議論、検討の場を与えて抜け落ちている項目を捕らえるよい機会だと思う。今回の検討会の内容は、今後の公開授業のあり方の検討にも参考にさせていただきたい。



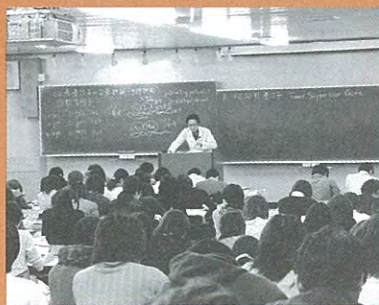
授業効果を高める新しい 「学生による授業評価アンケート」 づくりを目指します！

平成16年度前期科目「学生による授業評価アンケート」
実施期間：平成16年6月25日（金）～7月8日（木）

FD委員会では、大学の教育・授業を考え、より良くするために、平成12年度通年・後期科目から全学一斉に「学生による授業評価アンケート」を実施してきました。

実施率は、平成12年度94%、その後は98%前後と高く、本学で授業を担当する専任教員、非常勤講師において、FDに対して、積極的な取り組みをしているといえるでしょう。

今回で、前期・後期・通年科目のそれぞれで1年前との比較分析



が終わりました。そこで、これを機に「学生による授業

評価アンケート」の分析方法を見直したいと考えております。これまでは、学生の授業に対する満足度を高めることを目的とし、まずは満足度の低い授業の改善を促すような分析結果のフィードバックを行ってきました。今後は、授業の効果を高めることを目的とした分析方法や、良い授業をより良くするための授業評価法などを開発していきたいと考えております。今後の授業評価法に関して、先生方から忌憚のないご意見が伺えれば幸いです。

学生による授業評価アンケート実施率（大学全体）

実施時期	実施率
平成12年度 通年・後期	94 %
平成13年度 前期	98 %
平成14年度 通年・後期	98 %
平成15年度 前期	98 %
平成15年度 通年・後期	97 %
平成16年度 前期	99 %

第2回 [授業参観/同僚に学ぶ]

連番	日程	時限	開講学部	教員名	授業科目名	所属学部	参加者数
1	6月10日(木)	1時限 (9:00~10:40)	法学部	谷口 昭	日本法制史	法学部	9
2	6月14日(月)	2時限 (10:50~12:20)	薬学部	鈴木 英次	薬学英語I	薬学部	10
3	6月14日(月)	4時限 (14:50~16:20)	薬学部	岡本 浩一	製剤学I	薬学部	12
4	6月14日(月)	5時限 (16:30~18:00)	教職課程	平山 勉	教育情報論	教職センター	8
5	6月15日(火)	2時限 (10:50~12:20)	理工学部	三町 祐子	解析通論	理工学部	9
6	6月15日(火)	2時限 (10:50~12:20)	農学部	磯井 俊行	土壌学	農学部	8
7	6月15日(火)	6時限 (18:10~19:40)	経済学部	伊藤 健司	経済地理学	経済学部	9
8	6月16日(水)	2時限 (10:50~12:20)	理工学部	石原 莊一	エンジンI	理工学部	13
9	6月16日(水)	2時限 (10:50~12:20)	人間学部	石原 廣男	生命の科学	薬学部	7
10	6月16日(水)	3時限 (13:10~14:40)	人間学部	村松 定史	国際文化論	人間学部	11
11	6月16日(水)	4時限 (14:50~16:20)	都市情報学部	鎌田 繁則	都市学英語II	都市情報学部	5



谷口 昭
教授

TANIGUCHI Akira

開 講 学 部 …… 法学部 | 授 業 科 目 名 …… 「日本法制史」

授 業 内 容 授業の概要と目的: 東アジアの、さらに東の端に位置する日本列島～そこで経過した千数百年を法と制度という観点から体系的に把握する。日本史の基礎知識を、法という観点から整理(あるいは新しく学び)、諸々の歴史情報を社会科学視座から再構成する柔軟な発想力を養ってほしい。

中世の法と社会(法制史学上の論点<職と知行>をめぐって)

今から数百年の昔、日本列島で人々はどのような法生活を送っていたのか。その状況を知るためには、まず当時の社会構造を分析する必要がある。授業では、法制史学・日本史学の分野でほぼ定説となってきた、中世における複合国家の成立過程と相互の関連を説明するため、添付のようなスライド(まとめ)を用いて、時間と空間をビジュアルに表現するよう努めた。アニメーション機能をふんだんに使用することによって、順次のコメントに視覚的な効果を期待した。なかなか口頭の講義とレジュメおよび黒板では理解しがたい「職と知行」というテーマに挑戦したが、受講生の理解度と評価はさまざまである。おおむね好意的でよく分かったという声が多かったものの、このテーマに関する論述式のミニレポートの成績は必ずしも良好といえないところがあったように思う。スライド授業の限界を感じ

るべきか、さらに工夫を重ねるべきか、自問自答しているが、「講義」にツールとしてのITを駆使する試みは継続したい。同時に、文系、とくに社会科学系の科目について、担当者の意識は「授業」ではなく、あくまでも「講義」であることも強く感じた次第である。というのは、あらかじめ用意したテキスト(この場合はスライド)にしたがって話を進めるのではなく、教壇で、あるいは教室を歩き回りながら口と頭をフル回転させ、テーマについて常に考え、時には次の論考のヒントと閃きを脳裏に刻み込みつつ行うのが、教員の日常的な営みだと思うからである。その意味でも、参観者の(決して多いとはいえない)コメントをありがたく感じたことを付記しておきたい。



鈴木 英次
教授

SUZUKI Eiji

開 講 学 部 …… 薬学部 | 授 業 科 目 名 …… 「薬学英语I」

授 業 内 容 薬学領域の基礎科目の英文を読解できる英語力を身につける。特に、医学・生物化学の基礎科目を中心に学習する。

データに基づく、わかりやすい薬学英语Iの授業

薬学英语Iの授業では、専門科目をまだ充分学習していない2年生に専門の英文を読解させるので、かなりの困難がある。私が薬学英语を担当し始めた頃、専門英語の教育は理科系学生に極めて重要であったが、教育方法は未開発のままであった。

そこで、教育法を開発するために、薬学の基礎学問である有機化学と生物化学の論文をコンピュータに入力してデータベースをつくり、これをコーパスとして語句などの使用頻度や使用確率を活用して、語句、構文、文型などの用法を詳細に解明し、統計的に科学英語を研究した。その成果をもとに、教科書「科学英語のセンスを磨く」を編纂した。

本書を用いる授業では、語句、構文、文型などの用法を使用頻度や確率から、それぞれのデータに基づき重要性を解説し、合理的な英語教育を行うことができ

るようになった。また、専門の英文内容は、将来役に立つ重要事項を厳選し、論拠を持って解説し、文字だけでなく、絵、図、図式などを描き、学生諸君に理解しやすいように心がけている。また、予習を奨励するために、自ら率先して英文を読み、和訳をした学生には、平常点を加点することにより、授業の活性化を促進している。

岡本 浩一
助教授

OKAMOTO Hirokazu

開 講 学 部 …… 薬学部

授 業 科 目 名 …… 「製剤学I」

授 業 内 容 授業の概要と目的:医薬品は、投与部位から体内に吸収され、作用部位に到達して、はじめてその有効性を発揮する。本講義では、ヒトに医薬品を投与した後の吸収・分布・代謝・排泄に影響する諸因子を、薬物の物理化学的性質、製剤の性質、生体の体質という観点から整理し、医薬品の有効性を引き出すための製剤学的手法を論述する。

マス教育の中での個別指導

300名近い(時には300名を越える)学生相手に、1人の教員がどこまで行き届いた講義ができるのだろうか。講義のレベルの設定とともに、個々の学生の理解度をどう把握し、高めてゆくかについて考えている。講義は中の下レベルから始め、そこにレベルの高い内容を盛り込むようにしている。学生からは分かりやすいとの評価を得ることが多いが、その反面、学問的な興味や、学生の積極的な学習に対する意欲をそぐ結果になっているかもしれない。講義では、ゆっくり話し、丁寧に大きな文字で板書することを心がけている。授業評価で文字が見難いといったので残りの講義で大きくしたところ、私語が減った経験がある。学生の理解度を把握するため、毎回授業中に問題を解かせ、次の講義時に添削して返却している。本年度は前期の薬物動態学と後期の物理学IIで行った。(時間的制約のた

め、製剤学Iでは問題を出し、次回講義冒頭で解説した)。これらの科目では計算力が必要なので、添削方式は有効である。また、提出状況や出来具合をExcelで管理し、授業レベルの調節や、特徴的な学生の把握を行っている。質問・意見欄には、こちらが気づかなかった難解点や、説明不足だった点が指摘されることがある。就職や大学院進学、研究室の研究テーマなど、講義に直接関連しない項目を質問されるのも嬉しいものである。学生一人一人の顔と名前を覚え、授業やキャンパス内で全ての学生を名前で呼べると良いのだが、これは不可能に近い夢である。

平山 勉
助教授

HIRAYAMA Tsutomu

開 講 学 部 …… 教職課程

授 業 科 目 名 …… 「教育情報論」

授 業 内 容 授業の概要と目的:コンピュータやその周辺機器の技術革新は、インターネットに代表されるネットワーク、通信システムの改革(「IT(情報技術)革命」)をもたらし、マルチメディアに対するニーズも多様化している。本科目は実際のアプリケーションソフト(主に、PhotoshopやPremiere)を活用してマルチメディア教材の作品を制作する。作品制作を通して、学校教育におけるマルチメディア技術の可能性を追究する。

学生自身が授業の成果を実感できて、今後の学習意欲を喚起することができるか

この【授業参観/同僚に学ぶ】には、第1回に引き続き自身の授業を公開し、検討いただくことができてとても感謝しております。学校教育では、カリキュラムの改定に伴い、「総合的な学習の時間」が登場しましたが、大学の授業でも、教師からの効果的な情報伝達が主要な授業活動となることは、当然重要ではありますが、それに加え、授業内容についての受講学生からの質問、意見、感想が教師に即時的にフィードバックできる「双方向」的な授業創造が肝要だと考えております。そして、授業の90分の質、緊張感等を高めることと同時に、学生自身が1週間後の次の授業まで、自ら、考えたり、発想したりして、主体的に学ぶ姿勢を如何にして醸成していくか、半期の授業が終わった後に、学生自身が授業の成果を実感できて、今後、自己学習していく基盤を形成することを目指し、教材準備を含め、授業環境を準備しております。学生が教師から指示されたことを正確に行うというよりは、学生自身の発想が試される課題を多

く課しました。公開した授業の最終講義の際に学生に半期を通しての感想を書いてもらいました。以下、部分引用させていただきます。「この講義を受けていて、楽しいと感じた。それを子供たちにも上手に伝えていけるか。細かいことかもしれないけど、こうした小さな感動を伝えていくことから始めたいと思う。」

「実際に情報機器を触ることで、情報教育の難しさというものを感じました。情報教育とは、ただ単に情報の知識や情報機器の操作を覚えるのではなく、その情報機器を使えるようになって、それをいかに利用するかだと思います。情報機器の操作なんて誰でも教えられます。しかし、その健全な使い方や有効な利用の仕方を教える場は学校でしかないと思います。この講義を通して、情報教育について考える時間ができ自分にとってもよかったです。勉強になりました。」

学生が授業終了後に前向きになってくれていることが本当に嬉しく励まされます。今後も、より良い授業創造に向かって精進していきます。

三町 祐子
講師

MIMACHI Yuko

開講学部……理工学部 | 授業科目名……「解析通論」

授業内容 授業の概要と目的:理工学分野における問題に取り組むとき、微分方程式をたてること、解くことは欠くことのできない重要なポイントであろう。本講義では、微分方程式の初歩から応用までを丁寧に解説する。微分方程式は、その解法を知っているだけでは扱うことができない。解法に習熟していることに加え、十分な計算力も必要である。そのため、例題と演習を多く交え、微分方程式の理論と解法を着実にマスターすることを目指す。

「学力」と「気力」が次の授業につながるように

初等的な微分方程式を扱える事は理工系学生にとって基礎体力のようなものですが、実際に身につけるにはそれ相応の学力と気力が必要です。半年間これを維持させるためには、学生自身が自分は伸びていると実感できる。

帰宅後 に続きをやってみようと思える。次の授業も出たいと思える事が肝心だと考えました。

授業 の始めに行う復習部分では前回までに導いた結論のうち今回用いるものをもう一度説明し板書しますが、その際ノートを取らせない事にしました。ノートを取りながら理解することが不得手な学生が多い上、この部分を聴いて自分の躓きに気づく学生も案外多いからです。また、小さな躓きを自力で解消するヒントや、何がどこまで出来れば「授業が分かった」ことになるのかを示すために小テストを行うことにしました。毎回

講義の最後に15分程使って1-2題の問題を解きます。テストとは名ばかりで、講義ノートやテキストを見たり周りの学生同士教えあったりしながら、とにかく最後の解まで辿り着く事が目標です。学生が達成感を得られる事に加え、躓きやすい箇所や理解不十分な箇所がこちらに伝わります。

数学 は、一旦分からなくなると一気に分からなくなり、次第にやる気が失せて講義中はノートを取るだけになってしまうがちです。では、講義を熱心に受ければそれで良いかというところでもなく、講義を聴くだけで全部を理解することは、こと数学に関しては殆どあり得ません。ですから机に向い手を動かして考える姿勢をつけさせることが重要になってきます。

磯井 俊行
助教授

ISOI Toshiyuki

開講学部……農学部 | 授業科目名……「土壌学」

授業内容 授業の概要と目的:土壌は、作物の生育を制限する要因の中で、水分と養分を供給する重要な働きを行う。このしくみについての理解を深めるために、土壌の物理性、化学性、生物性等について農林水産省の改善目標値を参考にしながら各々説明を行う。また、地球上には、多種類の土壌が存在し、その利用のされ方の違いによっても性質が異なってくる。このような各種土壌の紹介も行う。さらに、土壌が有する環境保全機能についても言及する。

整理された板書を心がけてきましたが・・・

本学に着任した当初は、学生の要望を把握するために、毎回の講義後にその日の講義で最も印象に残ったことやその他のコメントを書いてもらっていました。その中からわかったことは、学生が整理された板書を求めていることなどでした。大方の学生は板書したことをノートにとるようなので、復習しやすいようにとのこと。しかし、それならばあらかじめプリントにしたものを配った方が効率が良いわけですが、学生の眠気防止や私語防止のためにもあって板書が続けており、配布しているプリントは図表のみです。それでもほぼ毎回A4裏表1枚を配っています。

一方で、口頭で講義したポイントをノートに書き留めることができる力量も磨かせなければならないという思いもあり、現在の講義法が理想とは思っていません。また、確か当初のFD授業評価でポイントを明確にする

ことを指摘され、初日の講義では全体の構成を説明し、各講義の初めには全体の流れの中での当日の講義の位置付けを説明するようにしています。また、「土壌学」の講義では節目節目でスライドを見せ、学生の理解を向上させるように努めています。これからは、各種AV機器の整った共通講義棟での講義に移行していきますので、PowerPointなどを使い、学生がより積極的に参加できるような双方向の講義になるよう模索して行きます。

伊藤 健司
助教授

ITO Kenji

開 講 学 部 …… 経済学部 | 授 業 科 目 名 …… 「経済地理学」

授 業 内 容 授業の概要と目的:様々な経済活動を、空間的な視点から見ていく。日本の経済的な地域構造は、高度成長期以降、大きな変化を経験してきた。この授業では、諸産業について基本的な立地理論を紹介した上で、現実世界においてどのように立地し、どのようにそれぞれが結びついているか、さらにそれが近年どのように変化してきているのかを講義する。

大講義室授業での質疑応答

毎回の講義では、授業のはじめに「感想・疑問・質問」の用紙(B5)を配布しています。大講義室の講義では、講義の途中で手を挙げて質問することは、事実上難しいと思われるので、疑問に思ったことを、その都度、書き込んでいってもらいます。書かれているのは、本質的な質問や意見があれば、配布した資料の中の分からない言葉の説明希望、あるいは「デパートとスーパーはどう違うのですか」というような基本的な質問、「うちの近所では……」というような情報、黒板の誤字の指摘など様々です。

次回 の講義では、それらから数十人分をピックアップしてB4用紙にまとめ、若干のコメントを付けたものを配布し、補足説明をします。2004年度前期の場合、3つの講義で合計600人分をまとめるのに、少なからぬ時間もかかりましたが、いくつかの効果もあるのでは

ないかと考えています。例えば、質問の内容と補足説明を全体で共有しやすい、他の学生がどのようなことを考えているのかも知ることができる(けっこう気になるようです)、細かな質問にも対応できる、前回の講義のことを思い出せる、掲載されるとちょっと嬉しいみたい、というようなことです。

日常生活に関わる話題から入っていますので、比較的好奇心を持って聞いてもらえているようで、出席とは関係なくても、ほぼ全員が用紙を提出してくれます。これをさらに、問題を認識する力、検討する視点というような本質的な学力を身につけることにつなげるという点は、まだ十分にできているとは思えません。大学で学ぶことの意義を感じてもらえるよう、精進していきたいと考えています。

石原 廣男
講師

ISHIHARA Hiroo

開 講 学 部 …… 人間学部 | 授 業 科 目 名 …… 「生命の科学」

授 業 内 容 授業の概要と目的:生物が共有する「生命」の普遍性について理解する。さらに、個々の生物、特にヒトの生命について取り扱う。また、最近のダイオキシンに代表されるいわゆる「環境ホルモン」が生命に影響するメカニズムについても理解できるような基礎的な知識が持てるようにする。

人間学部における「生命の科学」の授業において工夫したこと

人間学部の学生は、高校時代に、生物も化学も履修してきていない学生が多く、基礎学力がなかった。そのために基本的な内容を理解してもらうためには、画を用いることが必要であった。そこで、パソコンの使用や、毎時間図解の入ったプリントを作成して説明を行った。また、基礎的な事を理解させるためにも、小テスト、宿題、レポートを毎時間行った。さらに毎時間アンケートをとり、学生からの質問事項を確認し、次の時間にそれらの質問事項に答えるようにした。講義はこちらからの一方通行ではなく、教室の中をマイクもって歩き回り、なるべく学生の意見を聞くように努めた。

生命科学の最近の進歩はめざましく、生命に関する最新のニュース等は、新聞記事を取り上げて解説した。これらにより、ニュートン等の雑誌を買ってきて、授業で勉強した同じ内容が載っているという話に来て

くれた学生もいた事は、こちらもやりがいを感じられた。最近の話題の中で、クローン人間の作成、受精卵診断、遺伝子診断、遺伝子治療等について解説した後、倫理面から考えてどう思うかということについても討論し、レポートの提出をしてもらった。多くの学生がまじめに考えてくれたように感じている。

村松 定史
教授

MURAMATSU Sadafumi

開講学部……人間学部 | 授業科目名……「国際文化論」

授業内容 授業の概要と目的:世界における日本という視点から、複眼的に内外の文化交流を論じる。長い鎖国の後の開国、急激な国際参入という明治期の日本をまず注目し、来日した複数の外国人の記録から、日本人がどのように見られていたか、日本が外国をどのように受け入れていったかを国際的視野から問い直すことで、日本人の生き方をも考察する。

国際文化論…ヨーロッパ文化と日本文化…楽しく学び、深く考える

人間学部2年生を対象とした必修選択の基幹科目であるが、他学部履修制度で上限20名が理工学部7学科から加わった。受講者が60名近くとなったこともさることながら、人間学部だけのクラスとはおのずから雰囲気も異なるので、徐々に内容や方法にも工夫を加えていくこととなった。

導入には『世界がもし100人の村だったら』のデータをクイズ形式で使い、次にヨーロッパ15カ国の言語、面積、人口などを各自で調査してもらった。主眼は日本が国土ほかの比較から予想外に大国であることを再認識してもらうことにある。ついで「タイム」誌の表紙に描かれた新旧混在する日本像を、フランスからの女子留学生にも参加してもらって分析。外から見た日本の実像に迫った。テキスト『外国人による日本論の名著』は、学生にマイクをまわして順次音読させた。座

席は指定し、ほぼ毎講義ごとに最後に小テストを行い、テキストから自由な章を選び、要約と批評を書かせるレポートも課した。外国人から見た日本への評価の項目については、参観してくださった先生から「日本への眼差し」といった表現がよくはないかのご指摘をいただき、早速これに改めた。また、ヨーロッパ絵画展を見て芸術的および社会的観点からのレポートを宿題としたが、新たな体験学習として学生に好評であった。

講義でも画像やプリントを多く用意し、楽しく学びつつ良く考え、それを上手にまとめる訓練を目指しある程度は達成できたと思う。ただし、遅刻者と居眠りする者には手の打ちようがなく、今後の課題として残された。

鎌田 繁則
教授

KAMATA Shigenori

開講学部……都市情報学部 | 授業科目名……「都市学英语」

授業内容 授業の概要と目的:本講義は、イギリスの大学生が社会保障のテキストとして読んでいた同じ本を使って専門英語の勉強をする。当然、進度は遅くなるが、イギリスの最新の社会保障制度を勉強する。

専門科目を英語で学ぶ、教養英語に代わる意欲的な試み

本講義は、従来の教養英語の代わりに都市情報学部で学ぶ様々な専門分野を英語教材を使って学ぶ外書購読に近い科目です。このため、文法や適切な日本語置き換えと言った技術面を重視するのではなく、外国の大学生はこの科目をどのように学んでいるのかを意識した講義を行っています。

実際、私のクラスでもLSEの社会政策論で用いられていると思われる(?)テキストを採用し、イギリスで実施された社会保障改革について、日本人の目を通さない生の論評を講読している。ただ、こうした講義スタイルを実行するには相当程度の英語力が必要となる。学生諸君が十分な予習を行うのは当然だが、私の側もパワーポイントを使って一文ずつ原文を表示し、文法や日本語訳を確認すると同時に、段落ごとのまとめ、単元ごとの確認の小テストなど学生の理解度を十

分に確かめつつ進んでいる。学生の反応も、例年、当初は明らかに戸惑う者が多いのだが、通年講義の終盤ともなると、ほとんど毎回のように何人かの学生が質問をするために教卓に詰め寄り、私をキリキリ舞させるようになる。この講義を経て、学生諸君が専門科目にも関心を持ってくれるのならば、担当者としては大成功だと思っている。

速報!

第6回学内FD講演会

大学力を創るFD

～学部FDからの出発～



2005年3月8日(火)に第6回学内FD講演会を開催しました。今回は「大学力を創るFD～学部FDからの出発～」と題して基調講演を行いました。内容は以下のとおりです。

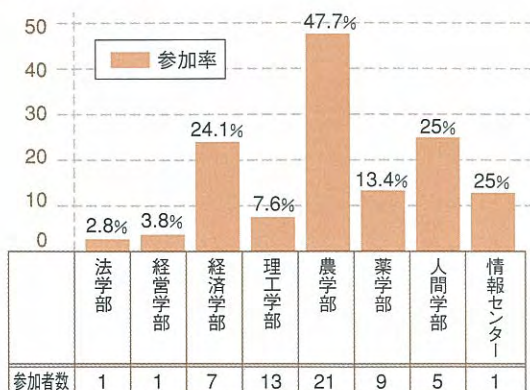
- 「FDの開発」…山形大学 高等教育研究企画センター 小田 隆治教授
(「あっとおどろく授業改善ハンドブック―山形大学実践編―」編集長)
- 「魅力ある農学部をめざして」…名城大学農学部 新居 直祐学部長

基調講演後は、班に分かれてテーマごとに討論と発表を行う「ワークショップ」が開かれ、最後に小田教授から講評をいただきました。

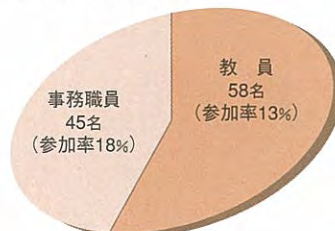
* 内容はFD NEWS vol.4で詳しくレポートする予定です。お楽しみに。

所属別参加状況

□ 教員参加率



□ 教員・職員比



総出席数 105名

※山形大学講師1名、大学院生1名出席者含む

[ワークショップ参加教員 31名]

FD
Academy Development

▼2005年3月8日(火)
の講演会風景



本学 では2回目の授業参観活動として6月10日から16日の間、授業を公開していただきました先生方また授業参観にご出席をしていただいた教職員の皆様有難うございました。

このたびのFD NEWSを編集するに際、授業参観としてご担当された講義を平成15年度前期授業評価アンケートの結果と比較し、どの部分に各先生が力点を置き進められた結果、評価がどのように変化したかを先生毎に掲載することをも検討しましたが、授業に参観していると、先生方の授業に対する熱意と意気込みを感じ、どの先生も前年度と比べ改善されているものと思いいく々に改善要求度を掲載することについては、見送ることにいたしました。

そこで、今回ご担当していただいた先生方で、前年度のアンケート結果を活かし、今年度の授業を進めるうえで、特にどの項目にポイントを置き改善されたかをご紹介します。

今回は、11名の先生方のご協力で授業参観を実施いたしましたが、そのうち、昨年、今年度と同じ授業科目を担当された先生は7名でした。

● 総合満足指標 より

総合満足指標 が前年度より向上した先生は7名中5名

なお、意欲学生での総合満足指標80以上が4名、内一人は93でした。

● 改善要求度 より

前年度 より要求度が5以上の改善をされた項目

- ・ 授業内容の必要性や位置づけなどをはっきりと示した先生1名
- ・ 板書やOHP等の字を読み取りやすく努めた先生1名
- ・ 授業の中で重要なポイントをはっきり示した先生1名
- ・ 学生の質問や発言を適宜促した先生2名
- ・ 授業計画書が履修に際して役立ように作成した先生1名
- ・ 授業では、学習意欲や興味が増すように工夫した先生3名

今年度 の改善要求度が、10以下の非常に良い評価を得ている項目

- ・ 授業の開始時間、終了時間が守られていた先生8名
- ・ 板書やOHP等の字を読み取りやすく努めた先生2名
- ・ 話し方は明瞭で聞き取りやすい先生1名
- ・ 私語等への対応により授業に集中できる環境に努めた先生1名
- ・ 学生の質問や発言を適宜促した先生1名

以上 の結果から、先生の授業を進める上でのポイントは、授業参観における参加者からの授業のヒント・学生との同じ視点・学生の様子等の意見を総合的に判断すれば、学生による授業アンケート結果の裏づけになったのではないかと思います。

大学教育開発センター 課長 内藤 孝行

FD
の
とびら
扉
vol.2

SD (スタッフ・ディベロップメント)

これからの大学改革は
教員のみならず
職員が果たすべき役割も
大いに問われる時代になってきている

名城大学FD委員会広報誌 — Vol.3

Meijo **FD NEWS**

発行日 平成17年3月15日

発行者 名城大学 大学教育開発センター

〒468-8502 名古屋市天白区塩釜口1-501 TEL. (052) 838-2033 (ダイヤルイン)

ホームページ <http://www.meijo-u.ac.jp/> Eメール edcenter@ccmails.meijo-u.ac.jp

編集協力 (株)進研アド 中部支社



この印刷物は、古紙配合率100%再生紙と環境にやさしい植物性大豆インキを使用しております。